



【ノート】 神戸大学の英語教育 : 回顧と展望

加藤, 雅之
水口, 志乃扶

(Citation)

神戸大学国際コミュニケーションセンター論集, 16:101-135

(Issue Date)

2020-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011987>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011987>



【ノート】神戸大学の英語教育—回顧と展望—

加藤 雅之／水口 志乃扶
神戸大学元教授／神戸大学名誉教授

English Education at Kobe University —Looking Back and Looking Ahead—

KATO, Masayuki/ MIZUGUCHI, Shinobu
Former Professor / Professor Emeritus, Kobe University

概要

神戸大学大学教育推進機構外国語第 I 教育部会では、2019 年度末で退職される 2 名の教員を迎え、「神戸大学の英語教育」をテーマとする座談会を実施した。本レポートは座談会を書き起こしたものである。座談会において、2 名の教員は、1970 年代から現在に至る神戸大の英語教育の変遷と今後の英語教育への期待について述べた。なお、本座談会で述べられた見解は、すべて発言者による個人の意見であり、組織・部局を代表するものではない。

キーワード

大学英語教育, 教養教育, スキルと内容, カリキュラムデザイン

1. はじめに

大学英語教育の改革の必要性が叫ばれて久しい。もともと、教育改革というものは、どこかで成果をあげた理論やモデルを持ち込めばうまくいくというものではない。教育実践は、組織・人員・制度を含む複雑な連関の中で行われており、現在のさまざまな慣行や約束事の背後には複雑な歴史的背景が存在するからである。つまり、将来に向かってより良い教育の在り方を考えようとする場合、組織・人員・制度の各面に目配りをしながら、過去の経緯を確認しながら話を進める必要がある。歴史的経緯は各種の公式文書を見れば容易に確認できると思われがちだが、実際のところ、英語教育の制度設計に関わる細かい決定の背景は文書に残されていないことが多い。また、記録があっても、度重なる組織改編の中で資料が散逸したり、失われたりすることもある。

こうした問題意識をもとに、神戸大学大学教育推進機構外国語第 I 教育部会では、外部評価に関わる資料収集の一環として、長らく神戸大学の英語教育で主導的な立場を取られた 2 名の退職予定教員にインタビューを行うこととした。

以下はインタビューの場となった座談会の概要である(肩書は 2019 年 1 月時点)。

日時:2019年1月31日(木) 08:50~10:20
場所:神戸大学鶴甲第1キャンパス(国際教養教育院)D601 会議室
出席者(50音順):加藤雅之教授(大学教育推進機構国際コミュニケーションセンター) / 水口志乃扶教授(国際文化学研究所)
聞き手:石川慎一郎教授(大学教育推進機構国際コミュニケーションセンター)
オブザーバー:柏木治美教授(同上。外国語第I教育部会長)・木原恵美子准教授(同上・同幹事)

当日は、瀧上・川嶋・米谷・山内(2005)で報告された座談会の持ち方を参考にしつつ、聞き手が神戸大学の英語教育関係資料と質問項目をまとめたレジュメを用意し、レジュメに従って質問を行った。なお、レジュメの作成には、水口(2019)に多くを負っている。

下記は、神戸大学における過去の英語教育の組織や科目のありようをまとめたものである。

表1 神戸大学の英語教育の組織および科目の変遷

年度	組織	主な提供科目
1970s~	教養部英語科	精読・多読・聴解・作文
1980s~	同上	リーディング・ヒアリング・ライティング
1983~	同上	英語1~4(4は選択)
1992~	大学教育センター外国語第I教科集団	人文・社会・自然
2002~	同上	Reading/Listening(他, 選択でSpeakingとProductive)
2006~	大学教育推進機構外国語第I教育部会	Reading/Oral(他, 選択でAdvanced)
2015~	大学教育推進機構国際教養教育院外国語第I教育部会	Communication / Literacy(一部学部では他にProductive/Autonomous。また, 選択で, Advanced。上級用ACEクラスもあり)
2019~	同上	Academic English Communication/ Literacy + Advanced

注:水口(2018)のp.272に掲載された図を基に石川が加筆

質問は、上記の年表をもとに、おおむね、時代別に行うこととした。座談会での発話は録音し、業者に書き起こしを依頼した。その後、両先生に内容の確認を依頼し、聞き手の責任で、若干の編集(用語の解説、匿名化、文言の補い)を行った。

なお、実際の座談会では、時間軸をさかのぼっての回顧も多くなされ、必ずしも、時代別に話が

進まなかった。そこで、以下は、時系列にあうよう、当日の発話の順序を若干入れ替えて記載している。なお、聞き手は、1988～1989年度に学生として神戸大教養部で英語教育を受けた経験を持つ(本節の文責は石川にある)。

2. 1970年代の神大英語教育

1970年代の英語

石川: 1970年代の英語教育というのは、先生方の赴任前かと思うのですが、どんな感じだったんでしょうか?

水口: ライティングとか。ライティングの授業。実は、私が赴任する前にあったと先生方がおっしゃっていらっしゃいました。

加藤: ありました。かなり前ですけど。

水口: かなり前にあった。

石川: どんな人が教えておられたんですか。

水口: 知らないです。

加藤: 普通の人じゃない?

石川: 普通の人?

加藤: 普通の、専門家とかいうんじゃないに。だって授業科目としてあったんです。

水口: らしいです。

石川: ただ、どうなんでしょう。当時の状況として可能ですかね?

加藤: 多分、純粋な和文英訳だと思います。

水口: 短いパラグラフ・ライティングとかじゃなくて。

加藤: そういうのじゃない。自由英作文とかじゃなしに、本当に入試に出るような和文英訳を恐らくやっていたんじゃないかと思います。

加藤: ライティングでしょう。(制度としては)よくできていましたね。

水口: でも私が赴任した頃はそれがなくて、それを教えておられた先生方は、添削が大変でやめたみたいな話を裏事情としては伺った記憶があります。

石川: じゃあ、その当時はこの「英語 1, 2, 3, 4」より前の時代には、今、ほとんど資料がないんですけども、その頃に実はライティングっていうのがあったということですね?

加藤: ありました。

石川: 他にどんなクラスがありましたか?それはリーディングとかだったんでしょうか。

加藤: パソコン持ってきていいですか。

石川: はい。じゃあまた後、そこ伺います。昔はそういうのがあったということですね。

加藤: ありました。

水口: あったらしいです。

加藤: 先ほどの(1970年代～1980年代の設置)科目。今、資料出たんですけど。

加藤: 1970年代いきます。

石川: 1970年代。

加藤: 精読コース, 多読コース。

石川: そんなだったんですね。

加藤: 作文コース, 聴解コースっていうのがありました。

水口: 1970年代。

石川: 精文コース? 精読コース?

水口: 精読。

加藤: 25名。

水口: クラス, ちっちゃかったんですね。

石川: すごい。

加藤: でも多読コースは50名。作文コースは25名。聴解コースは100名。

水口: 聴解。

加藤: 多分, テープレコーダー持ってきて, 100人に声聞かせて, さあどうだ, というコースだと思います。でも, 今思えばなかなか先取りしてる。

石川: ほとんど4技能別ですよ。

加藤: 4技能。

水口: そうだ。

加藤: 作文あって, スピーキングはないんですけど。2年生は自由選択。それから1980年代はそれがライティングコースが。

3. 1980年代の神大英語教育

加藤: 1980年代はライティングコース25名で, これ, (以前のものがまだ)残ってます。それでリーディングコース50名。精読と多読の区別はなくなって, ヒアリングコース100名。

石川: そこは100名なんだ。

加藤: それが90年代になると今の(資料の)話で。

石川: 「英語1~4」ですね。なるほど。

加藤: (その後)人文, 社会, 自然とこういうようなコースになるので。

水口: 私, それで精読コースとか知らないです。

加藤: これ多分, 「英語の1, 2, 3, 4」と微妙に連動してたのか, 混ざってたのか。これだけではなような気がします。こういう科目があったという。

水口: 私が来た時は, すでにそういうくくりで教えるっていうのはなかったです。

水口: だんだん思い出してきた。それでとにかく文学作品を読めないの, 昔まだ紙媒体だった雑誌の「タイム」とかを印刷して, それで読んだ覚えもある。

石川: 「タイム」, ありましたね。はやってましたよね。

水口: そうです。「タイム」を読むみたいなの。

水口: 大学生になったから「タイム」を読んでみようみたいなことを, 若気の至りでやりました。

- 水口: でも結構, 学生ついてきました, 昔の学生。今みたいにふんぞり返ってるんじゃないくて, 来る人たちが少なかったっていうのもあるし。
- 石川: それはその2年生, 3年生の選択という意味ですか。
- 水口: 大学に来られる人, 女子学生がすごく少なかったです, ここは。だから女子トイレもとても少なく。まず神戸大赴任して最初に英語集団の先生に教えていただいたことが, 女子トイレはここですって。それぐらい少なかったっていうことなんです。
- 石川: 私が学生だったころを思い出しても, 「英語 1, 2, 3, 4」, みんな精読。それ以外のことをやった記憶は全くないので。ときどき, 詩の朗読のテープ聞かされたっていう記憶はありますけど, あれをリスニングというのでなければみんな精読でした。
- 水口: 私, 研究室にいまだに教養部っていうカセットテープレコーダーがあるので, 博物館みたいだと。置いていこうか。
- 水口: そうですね。こういうのがありました。だからカセットテープだったかもしれない。CDとかじゃなくて, その後CDだと思うんだけど。
- 石川: 昔, オープンリールもありましたよね, 英会話のオープンリール。
- 水口: そこまでは私も知らない。
- 水口: 私はカセットだった。
- 水口: じゃあ, 今度持ってきます。
- 石川: 研究室に。
- 石川: はい。ただ, 本当にそれは考えてることで。旧制姫路高校の理科の実験器具なんかが……。
- 水口: 何か(建物の)下に置いてますよね。
- 石川: あれ, 結局手放すことにしたらしいんですけども, 維持できないからどこか博物館に寄贈するって言ってますけど。ああいう感じのことの英語版ができればいいと。今度, ここの教室, 改装するときに昔のカセットとか展示するとか。
- 水口: こういうのがあったんだよって。
- 石川: 昔, 使ってた教科書とか, 昔の試験問題とか。お持ちじゃないですか。残していただけたら。
- 水口: 試験問題は持ってないです。
- 加藤: 持ってない。ちょっと面白いデータなんですけれど, 今思うとわれわれが昔はこうだっただろうというような型にはまらなくて, 例えばコミュニケーションという, **English Sharing Practice** という教科書を使ってる先生がいます。
- 石川: どなた?
- 加藤: 名前は分かんないですけど, 『諸君の最も遅れていると思われる, ヒアリングの能力を伸ばしたいと思っています』。これ, 1970年です。それから1975年, 対極ですけど, 『真夏の夜の夢』を使ってます。『君たちのほうに想像力があれば, 堅苦しい講読でも興味がわくことは請け合い』。
- 水口: それ, A先生だよ。

加藤: 『見れば2時間で済むものを1年間に引き伸ばして、できるだけ面白く読むという嫌がらせをします。それに君が耐えられれば相当の芝居好きです』。

石川: A先生か。可能性は高い。

加藤: 多分、選択を念頭に置いてると思うんだけど。

水口: そういうのを書いてたんですね。

加藤: はい、書いてました。

水口: それで、学生が選ぶと。

加藤: 精読, 多読ではエリック・シーガルの『ラブストーリー』を1980年に『ある愛の詩』の原文を講読するという。『きびきびした現代アメリカ英語, 口語英語のやり取りをテキストから学んでほしい』とか。

水口: 映画をお好きな先生もおられたので。

加藤: 当時, 訳読べったりでもなくて, 個々のレベルでは先ほどのコミュニケーション, 1970年, ヒアリングが, コミュニケーションが遅れているっていうような認識の下でいろいろとやっておられたという人もいるということが分かりました。

水口: ただ, 全体に広がらないんだよね。

水口: 今もそうだけど, 個人のレベルでは皆さん, 楽しんだり, 一生懸命, 学生も。でもすごいです。『諸君』って書けるんですね。『君たち』とか。今, 絶対書けないです, シラバスに。

石川: 皆さま, とか。皆さんか。皆さまって言いそうなるけど。

加藤: 1975年のこの先生は, 「タイム」, 「ニューズウィーク」の最新記事をプリントで読むということ。

加藤: 時事的なものも, もちろんやっておられると。

女性教員

石川: 先生が赴任されたときに, 既にいらした, 女性の教官の先生っていうのは?

水口: あと4人いらっしゃいましたけど。私, 5人目だったんですけど, M先生という方が英語集団におられて。

水口: あとは中国語とかロシア語とかドイツ語か。

石川: K先生とかもおられましたね。

水口: 中国語のK先生ですね。ロシア語のO先生とか。

水口: ドイツ語のM先生。

水口: そういう方々と, なぜか魔女の会とかっていうのをつくって読書会やってみました。

1983年~のカリキュラム(英語1~英語4)

石川: 神戸大学の英語のことを振り返る場合に, 大綱化でどうなったのか, その前と後で何が変わったのか, どうやって今みたいになったのかっていうのが, われわれとしては一番気になるところなんです。この水口先生の論文の資料にある『1983年から1992年の英語1から4の選択

制』って、これどういうふうな感じでやっておられたのか。その辺、伺ってよろしいでしょうか。

選択クラス

水口： さっきもちよつと言ったんですけど、「選択制」っていうのはちよつと語弊があつて、単位は今、石川さんがおっしゃってくださったようにきっちり義務的に何単位取りなさいって決まってるんですけども、クラスが、今だったら1回生だったら学番順に、あなたは何クラスに入るからこのコマを取りなさいってなつてたんですけども、(当時はそれが選べたんです。)確かこれ(が適用されるのは)2年生でしたか、加藤さん。

加藤： 1年生は(割り当てクラスが)決まつてたと思います。

水口： 2年生が義務的に決められたクラスではなくて、自分の希望を(出せたんです)、第何希望までかちよつと忘れましたがけれども。

加藤： 結構書かせました。

水口： それをパンチカードに書いてもらつて、英語集団のほうで希望と人数を突き合わせていって、それで1週間後に発表するという…結構、手間暇の掛かる(制度でした)。本当、1週目から始められなかつたです。

石川： じゃあ、学生は好きな授業に1週目は出るんだけど、2週目もそこにいることができるかどうかは分からない。

水口： 1週目は、だからショッピングです。

水口： 2週目に実際決まつて、ただ、学生の希望っていうのは本音を言えば、単位の取りやすい先生のところに行きたいわけで。

水口： そういうところはやはり人気がとてもあつたように思います。そういう先生のところ。ですから当然、選に漏れる人もいて、そういう人たちは第何希望まで回されたり、そういう調整があつたりとか。学生ですからいろんな事情で来られないとか、失念していたとかいろいろあつて処理が結構、みんな教員がやつたので、特に新人。

石川： ちょうど水口先生、赴任された頃ですよ。

水口： はい。私はなぜか2回もやつてしまつて、本当にばかだと自分でも思ひましたけれども、結構な手間暇でした。当時は本当に文学の先生もすごくたくさんおられたし、皆さんは内容も点でバラバラで、その四つのスキルがどうたらこうたらということを口にもできないような、そんな雰囲気、…何か戯曲を読むとか、イギリス小説を読むとか、そういう先生が本当に多くて。語学が多分、私ともう一人、二人くらいしかおられなかつたくらいで、あとみんな文学の先生で。

石川： 当時、そのもう一人、英語学の先生って、ちなみにどなた。

水口： Y先生とか。Y先生ってご存じですか、英語教育の。

石川： もちろん。

水口： ラジオで大変にご高名な先生で。あと、どなたがおられましたか？

加藤： N先生とかはこちらに？文学部かな。

水口： Nさんもいた。

加藤: もう文学部, 移ってたか。

水口: 文学部, 移る前に N 先生いらして。あと, T 先生がちよっと語学のことをしゃべられた。でもほとんどいつもストップパードでした。

石川: 質問なんですけれども, 選択制っていうのが, 今, 神戸大学では(上級クラスを除けば)全くと言っていいくらいないんですけれども, これがどうやって成立し得ていたのかと。普通に考えれば, 人気のクラスにはぱーっと人が固まって, いっぱう, この先生は希望者ゼロってなりそうです。でも, 調整をすると, 学生の不満が高まるでしょうし, この辺はどうやって回ってたんですか。

加藤: 第2, 第3希望で救ってたっていうことかな。それが第1希望で結構, 大人数クラスもつくったようにも思います。

石川: 大人数, 例えば覚えておられる中で。

加藤: 大人数というか, 40とかじゃなしに50ぐらいまでいこうかとか。

水口: ここにも私書きましたけど, これ平均数なんですけど, 当時54名ですか。今よりかすごく多いわけで, 私の成績の取ってあったのを見ると最高70人いました。

石川: 70名。2コマのノルマ換算じゃないんですね。

水口: それで1コマ。

水口: そうだったから, きっと学生が, 大学の授業なんてこんなもんだみたいな

石川: ですね。

水口: 当時は思ってたんだと思います。

クラスの内容

石川: 「英語の1~4」っていうのは, それぞれ, 特に何を, ていうのはなかったですか。

水口: なかったです。

石川: 全くフリーハンドで, 何の制約もなくて。

水口: なんとなく4種。教師が勝手に決めていたっていう, すごく. 何の方針もない。

石川: 私, 自分の成績表を見て今, 思い出したんだけど。

水口: 成績表も取ってあるんですね。

石川: 私, (2単位=2クラス取らないといけない)「英語1」を1つ落としたんです, 1単位分。で, 今, 昔の成績表を見ると, 「英語1」は結局1単位しか取れていなくて, その分, 「英語3」を余分にとって, それでOKになってるんです。ということは積み上げ制ではなくて総枠に総単位数でいくっていう計算だったんじゃないか・・・。

水口: 一応, 数字的には1, 2, 3, 4で積み上がってるように見えるんだけど, 内容は誰がチェックするということもなく。

石川: ですよ。ただ, 4種類の授業で単位を取っていけばいいという。

水口: 総単位数で何単位取ればいいのかっていうから, 多分, 1を落とされても3で振り替えたとか。

水口: 非常になんかいい加減にだったんだと思います。

石川: 私が落とした授業っていうのはA先生。

水口: 長いこと非常勤しておられた。

石川: 入学してすぐ、いきなり、A先生が詩をやられたので、その当時、詩をやる気が全然なくて、落としてしまったんですけども。ということはそのときは科目目標みたいなものも恐らくなかったんでしょうね。

水口: ないです。

加藤: ないです。

水口: きっと何か書いてはあったんだろうと思いますけれども。

石川: それぞれの先生が好きなことを目標として掲げてやっておられたっていう。

水口: 当時は本当、文学の先生が多かったので詩をやらせる先生とか、小説、戯曲。

教材・授業の進め方

加藤: 教科書も小説や戯曲といった類い。いわゆる総合教材はあったのかもしれないけど。

水口: なかった。あんまり。

加藤: 基本的に。

石川: 研究社の小英文叢書みたいな。

加藤: まさに。

水口: そうそう。

石川: 白と黄緑の。

加藤: (自分では)使わなかったけどあれ、使ってる人もいました。

石川: ちなみにその当時に両先生が使っておられた教科書はどんな感じなんですか。あるいは授業の内容とかは。全く自由であった時代に。

水口: 全く自由でした。私は語学に関係した、さすがに研究社叢書は使いませんでしたけれども、言語学っぽいものをつくって、ロビン・レイコフをちょっと簡単にしたようなものとか、あるいは心理学を使ったときもありました。

水口: そうすると学生が内容的に興味を持ってくれたっていう。その当時、ほとんどがリスニングとかいう概念がまずなかったのでリーディングと、あとすごく無理をしてライティングのクラスをやったことがあります。

石川: やらなくてもいいのに。義務でもないのにも関わらず。

水口: やらなくてもいいのにやって。あるいは欧米圏で出ている速読を訓練する教科書とか、「リーディング・ファースト」とか、リスニングもやらなくてもいいのにやっていて、それも「ビトイーン・ザ・ライズ」っていう文脈を読むみたいな、そんなのを使って。まだ研究室にあるかもしれませんが、そういう本当、総合教材っていうものがまだ発達していなかったの、直接に欧米から取ったりとか。ちょっと高いんですけど、でも当時の学生、文句も言わずに買ってくれました。

石川: 今でいうと3000円ぐらいの値段だったんですか。

水口: そうです。もちろん、マニュアルも出回ってないし。

石川: インターネットで訳も見つけられないし、インターネットもないし。

水口: ない。

水口: せいぜい何か裏講義情報みたいな、そんなもんしかなかった。

石川: 裏講ってありましたよね、確かに。

水口: 散々なこと書かれたっていう。

石川: 加藤先生は?

加藤: 私は英文学関係を最初は使いました。例えば、コンラッドの『闇の奥』とか、チャールズ・ラムの『エリア随想』とか、H・G・ウェルズもあったかもしれませんが、そういうのから始まって、これはだめだと。

石川: だめだ。クルツは分からん、と。

加藤: 私自身もこれを英語の授業でどうこうって、なかなか難しいところもあって。

石川: ちょっとそこを伺いたいんですけど、例えば『闇の奥』って比較的薄いんですけど、それでも半期では読み切れないですよ。

加藤: すごくあります。

石川: 「エリア」も薄めかな?

加藤: はい。

石川: 例えばクルツとかの話なんだけど、『闇の奥』って最後まで行かないで終わるんじゃないか・・・と思うんだけど。

加藤: (途中で)終わります。

石川: どういうふうにその授業は・・・?

加藤: 最初は律義に訳していたので、1回で半ページとか。

加藤: いわゆる昔ながらの授業が進行していました。

石川: そうすると何か、『闇の奥』の旅が始まる前ぐらいで学期が終わる・・・

加藤: そうです。ベルギー行ってなんやかんやで・・・というような感じで。

石川: その時代の授業の進め方っていうのは、「来週当たる人は〇〇君ですよ」って言うておいて、その人が予習してきておいて順番に「はい、〇〇君」とあてるといようなものだったんでしょうか。

加藤: どっちだったかな。

加藤: そういう場合もあったし。

水口: それはやったことない。

加藤: その場でっていうのもありました。だから私、ここに二つ目なんですけど、前、A大にいてて、で、国立に来て何かすごくレベル高いようなイメージがあったので。どういうレベルでどういうようなことっていうのは、事前情報で全然リサーチしてなかったし、もらえなかったし。

水口: もらえなかったです。

加藤: そういうのもあって。

石川: 研修もなく。

加藤: 研修は。

水口: ガイダンスもなく, FD もなくだから。

石川: FD もなく。

加藤: ガイダンスみたいな, あれもなく。それは今から思うとすごい時代だったとは思いますが, そのときは一生懸命ですから。

水口: 去年, こんな教科書を使ってましたって, 一覧は見せていただいた気がするんですけど, どういう先生がどういうものを使っておられるっていうのは, 何か紙媒体で。

加藤: そうです。もちろん, 紙媒体です。

水口: そういうものは外部に一切漏れないんです。

石川: 先生の論文で, (最近, 教科書リストを作成してウェブに公開するようになって)教科書会社が喜んだって書いてありました。

水口: すごく喜んでおられました。そういう情報は一切頂けなかったのが, 教科書会社の方も足で回って, この先生はどういうご専門だからどういう教科書持っていくとかって。

水口: のきな時代です。文学の先生方は格調高く小説だ, 詩だ, なんてらだって。あと古典をやっておられた先生もおられたので。

石川: 古典ってどの辺りですか。

水口: ギリシャ, ラテンの先生っておられたので。だからシェイクスピアやってた人もおられましたし。ですから, それから見ると言語学なんてみたいな。まず自分がボキャ貧であるということとか, リーディングなんて解説ができないわけです, 自分自身が。そんなバックグラウンドないし, 教養的な素養が全く違うので。あとすごく長年, 研究者をやってこられた先生たちなので, 積み上がってるものが全然違ってきて, そんな若い大学院出たての人が教えられることなんて何もなくて, 一覧表見たって何の役にも立ちやしないっていうものなんです。ですからさっき言ったように, もしリーディングで読むときはちょっと言語学に引っ掛けたいものとか。

石川: その当時の, 水口先生の授業での読ませ方というか, 今で言うとタスクというか(はどうだったんでしょう?)当時 100 分だったって記憶してますけど。

水口: そうですね。長かったですよね。

石川: そうですね。100 分授業だったと思いますけど。

水口: 私は訳が自分でできないんです。だから訳はとつても苦手なので, 最初から質問項目をだ一と書いていくんです。

石川: 黒板に。

水口: いや, プリント媒体に。で, 英語でクエスチョンとアンサーしなさいみたいな感じで。読んで, はい, 答えなさいみたいな感じでやってたような記憶があります。

石川: それはいわゆるグループ学習みたいなイメージではなくて, 個人的に一人一人, 50 人のクラスで読んでいく。

水口: そうです。一生懸命回すんで。

石川: 回すとは。当てるとの意味。

水口: 当てるんです。

水口: だから目標はすごく多かったですけど、1日1回はしゃべることっていう、そういうのを自分に課していて、みんなにしゃべらせるみたいな。若気の至りです。

石川: いえいえ。

水口: グループ学習っていう意識もあんまりなくて、10年ぐらいしてからですか。グループでやったほうが効率的かもしれないと自分で気が付いて、ほそぼそとこっそりとやっていました。

水口: でもそんな、文学で格調高くやってらっしゃる先生の前では絶対言えず、だから自分ができるものしかできなかった。今も変わりませんけど。

石川: いえいえ、なるほど。

英語教員の組織

石川: ちょっとこれは確認なんですけど、教科集団という制度ができる前、水口先生が赴任された当時は、まだ教科集団制じゃないと思うんですけど。そのときって、英語の担当者は、どういうバーチャルな単位をつくっていたんでしょうか？意思決定とか、どういう会議体とかで行ってたんでしょうか。

水口: それって教養部が解体した後の話ですよ。

石川: 教科集団ができる前、教養部の時代は？

加藤: 教養部の中でじゃないですか。

石川: 教養部の時代。教養部英語科みたいなものがあつたんですか？

水口: 教養部時代は英語科があつたから、部屋もあつたし。

石川: はいはい。そういえば、その部屋に、女性の方がおられましたよね。助手さんかなんかで。

水口: 書籍がすごくたくさんあって、辞典とかも。図書館行かなくてもそこで全部。

石川: その当時の教養部英語科っていうのは、例えば科長がいるとか、選挙で科長を選ぶとか、何かそういう組織だったんですか？

水口: ありました、ちゃんと。おられた。

石川: デパートメントだったんですか。

加藤: いや、肩書はないんじゃないですか。役職はないんじゃないですか。

水口: いや、でもおられた。

加藤: 代表はいたけど、でもそれって役職？

水口: 知らない。

石川: 例えば定例会議みたいなものもあつたんですか。

水口: ありました。

加藤: それはありました。

石川: じゃあ、それを引き継いで、ほとんどそれと実態は変わらないような形で教科集団制度に動いていったっていう。

水口: そうそう。

- 水口: でも、よくみんな、そこ、割とサロンみたいになってたから、結構。
- 石川: OED(※オックスフォード英語大辞典)並んでましたね。奥の壁に。
- 水口: もちろん。OEDは並んでたし。
- 石川: その横にLLの部屋なかったでしたっけ。LLの部屋、違ったか。
- 水口: LLではないです。
- 石川: LLの部屋ではなかった。
- 水口: (語種ごとの部屋は)ドイツ語もちゃんとあったし。でもあとフランス語とか中国語とかはなかった。そういう部屋はなくて。(英語は)わざわざ補佐員の方が1人ずつ付いておられたので、プリントしてもらったりとか、その部屋の管理とか、あと非常勤の管理(をしてもらってました)。非常勤の先生方がよくそこにおられて。非常勤講師室にみんな行くんじゃないくて、それぞれ科目の(部屋の)ところにおられて。そこが面白かったのはアカデミックな話題で盛り上がる。今だったら研究室にみんなこもっちゃって出てこないけれども、そこでこんな何か話して、「えー、これはこうやで」って、誰かが必ず何かを教えてくれるんです。だからそれはすごく勉強になった。
- 加藤: 結構「最近、医者にかかったけど」とか、そういう話題が多かったと思う。
- 石川: 雑談ですよ。
- 水口: そういうのもあったんですけど、ただ、どこか演劇行こうとかそういう話も出てきて。だからちょっと今とは違った、たこつぼではない。そういう雰囲気はあった。よく飲みにも行きました。悪いことはいっぱい教えますみたいな感じで。今、悪いことも教えられないから。
- 石川: 教養部の英語科のその会議がそのまま実質的には教科集団に移行していたと。
- 水口: そうです。

4. 1990年代の神大英語教育

3 領域カリキュラム

- 石川: はい、分かりました。その後、またさっきの水口先生の書かれた文章でいきますと、1992年からいわゆる「人文、社会、自然」の3領域で2単位ずつ取ることになりましたね。
- 水口: そうなんです。それで6クラス。
- 石川: で、6単位取るというふうに。
- 水口: 幸せに6クラスになるんです。

コア・カリキュラムとの関係

- 石川: ですよ。その点について、私の恩師でもあった森晴秀先生が文章を書いておられます。コア・カリキュラムとの関係で、今の教養原論を人文、社会、自然の3本立てにしたから、それと連動させる形で英語も、人文、社会、自然の三つを導入したっていう記録があるんです。この辺の背景というか、これもまた議論は一切なかったんでしょうか。テーマ別導入に関して。
- 水口: これも多分、当時文部省から随分言われたんだと思う。(教養部から)国文(※国際文化学

部)に変わるときもすごく大変で、みんなが本当に(※設置審査で)査定されるわけです。その資料をつくるのもなぜか自分たちの研究費から出させられたとか、そんな覚えがあって。

石川: それ、設置申(査)のことですか。

水口: そうそう。設置審がすごく大変だったんです。だから英語(の授業の内容をどうこうするという)よりは、みんな設置審、全員掛かる(のでそちらのほうが大変な)わけです。当然、業績少なくて苦労するわけです。若い人たちだけじゃなくて今まで割と長く勤めておられた方も、文部省の設置申の基準に合わない方もたくさんおられて。そういう設置申をやってるときに、ついでに、M先生が書いておられるような改革がなされた)。これ、すごいポジティブに変えたみたいを書いてありましたけれども。

石川: そう書いてますね。

水口: これはすごい文章力だと、今見ていて。結局は「講読 1, 2, 3, 4」とかっていうのは、事務の人たちからも言われたんだけど、「あまりに何も考えてない」と言って、それで人文、社会、自然っていうのを無理やりつくり出したんだと思う。このネーミングは結構、文部省に覚えが良くて、文部省がどうも宣伝したらしくて、外部から視察に来られたときもあるんだけど、視察に来られるほどのものではなかった。すごい何か恥ずかしかったのを覚えている。

加藤: でも有機的に教養原論のコアとつながっているっていうことで、非常に、M先生が書かれているような感じで、説得力はあったと思うんです。

水口: だって今までほとんど何もなかったんで、1, 2, 3, 4 ですから。

加藤: そうそう。ちょっと統制をかけてということで。

水口: 一応、ジャンル別に。理系のこともちょっとは考えてますっていう。自然っていうよりは。

加藤: 人文、社会、自然のカテゴリーで切り取っているっていうことで、きれいだとは思いました。

教員の配当

石川: 質問なんですけど、今だとうちはコミュニケーションやりたいですか、リテラシーやりたいですかと、ある程度先生方の意向を聞いて、それに合う形で(クラスを)配分していますけども、もし人文、社会、自然(という割り振り)だと、普通に考えるとみんな人文に手を挙げると思うんですが、そこはどういうふうか。

水口: 割り振られた。

加藤: (意向調査的なものは)なかったです。

石川: 機械的に。

水口: うん。

加藤: 「自然」だとちょっと困ったっていう気はしました。

水口: そう。

加藤: 私は。

総合教材へ

水口：私も。だからそれからみんな、やっと教科書を探すようになった。

水口：それで総合的な教科書も大体この時期に出てきたので。

石川：自分の本当のこれまでやってきた専門じゃない内容を教えるっていうときに、何か頼るものがほしいと。そこで(総合)教科書っていうものを入れはじめた。買わせはじめた。業者も出てきたという。

水口：そうです。それがきつこの時期で。だから総合的な教材っていうのは、昔はなかったんでこの時期からみんなが使うようになったんです。

石川：今、水口先生がおっしゃったように基本的には個人の判断っていうのか、教員個人で意識のある人はそういうものをやり、そうじゃない人はそうじゃないものをやりという感じだったんでしょね。はい、ありがとうございます。これで大体、人文、社会、自然時代について伺いました。

水口：「自然時代」・・・

英語教員とESP

石川：先ほどの件に関して、ESP(※専門分野のための英語教育)のことを言ったときに、結局、英語教師が「自然」を教えているのか、教えるべきなのかという議論がありますね。これは、今でも、やるべきだという人もいれば、やらないほうがいいっていう人もいるんですけど、この辺りはお考えはどうですか。両先生。

水口：できることとしたら、本当に、「詩を読まない」という程度の、それくらいなんですけれども。ただ、学生は、例えば、直角ってどう言うの?っていうのでも、それでもうれしがってたです。理系の学生は。そういうのは自分で言えないっていう。こうやって書くんだとか、教科書も自然系のもは今でもあんまり多くないんです。でも、多くないからきつと私、「タイム」とか何か他から取ってきたんだと思いますけれども、興味は持ってくれた。今の学生よりかはもうちょっとちゃんと読んできた。

加藤：イメージとしては、90パーセントはEGP(※一般目的のための英語教育)だと思うんです。

石川：ジェネラルね。

加藤：はい、ジェネラルパーパスのほうで。で、10パーセントにESPがあるようなイメージなので。

石川：それ人文、社会、自然時代は、ですか。

加藤：(その時代)も(現在も、ということ)、です。そうです。だからちょっとした味付け部分でなんとなく、自然よりかなっていうことで、バリバリのESPをやることは教員にはできないから。私には少なくともできないし、それ用の英語スタッフを配置するっていうのも無理だと思いますので、ESPは上に任せるのが。例えばここで人文、社会と分かれてても、その自然はあくまで英語の教員が・・・。

水口：自然っぽいなっていう。

加藤：扱える範囲でのESPでいいんじゃないかと思ってます。

加藤：専門で求めているのは、パーティーで話せるようにしてくれみたいなことを言うじゃないですか。

石川: 実際にはそうですね。ただ、さっき3区分制で文科省に褒められたっていうお話もありましたけど、学生の所属が文学部であろうが、医学部であろうが、経済であろうが、必ずみんな人文と社会と自然を33パーセントずつ取るっていうのは、理念としては確かに。

加藤: 多様性というか。

石川: 今聞いてもきれいな話というか、非常に分かりのいい話でした。はい、ありがとうございます。

水口: 大きく変わったんですね。

5. 2000年代の神大英語教育

コア・カリキュラムから再び技能別へ戻った背景

石川: 2002年から、人文・自然・社会という教科名が変わり、「リーディングとリスニング、スピーキング・プロダクティブ」となります。今回、加藤先生に古い時代を調べていただいたんですが、どうも1970年代の(4技能)システムがこの2002年ぐらいに復活してくるわけです。このとき、それまでの3領域(人文、社会、自然)を放棄して4技能に戻そうとしたのは誰が決めたのか、どうやって決めたのかっていうところは？私が調べたかぎりでは分からないんですけど。

水口: 分かりません。

石川: でもその頃先生、中核メンバーでいらしたんじゃないですか。

水口: きっとどこか上のほうで。鶴の一声で。

石川: でも鶴がそんな科目の内容まで決めますか。

加藤: いやいや。ワーキンググループについては・・・。

水口: やったのか。

加藤: ワーキングでやったんじゃないか。

水口: やったんだっけ。

加藤: これっていつ変わったんですっけ？

石川: 2002年。

加藤: 資料の4番目ですか。

石川: はい。この水口先生の資料でいくと、2002年からの4技能別時代です。

加藤: でもこれ、あれですよね。

水口: どうやって決まったのか。

石川: 2002年、平成14年ですね。このころの外国語第一部会の代表者は、平成12年度がU先生。13年度、Y先生。14年度、I先生。15年度、Y先生。この辺りの時代です。教科集団会議でこのことを議論された記憶は？多分、部会には出席率がもっとも高いお二人の先生でいらっしやると思うので。

加藤: ともかくこの前の段階からコミュニケーション的なものが必要だっていうのは、1990年の末ぐらいからあったんです。

石川: それは学内的には誰がどういうチャンネルで、そういう要望なり、圧力なり、希望なりを述べたんですか。なんとなく英語の教員がそう思い始めたんですか。

加藤: 教員も思い始めたし, 分かんない。上のほうに誰が会議で出て, そういうところで聞いてきたのかは, 私は分からないけど。

水口: U先生, Y先生……。

石川: U, Y, I, Y(先生です)。

加藤: でもU先生, 多分, 評議員とかになっておられるから。

水口: Y先生も評議員になってらっしゃいます。

加藤: Y先生も。

石川: その辺がまた上に出ていって。

加藤: そうです。

水口: すごく喧々諤々と何か話し合った覚え, ありますか?

石川: でも(変化としては非常に)大きいですね。

水口: 大きい。

石川: 内容別の3領域が技能別の4領域に。

加藤: 導入の前に「人文, 社会, 自然」の授業のときにコミュニケーション系の教科書はオールマイティーみたいな形で, 例えば人文の授業で TOEIC 系のリスニングをやってもいいしみたいなルールというか, 合意があったんです。

石川: そうだったんですか。トランプのジョーカーカード(※「七並べ」ではジョーカーはすべてのカードの代替になる)みたいに。

加藤: そうです。ジョーカーカードみたいに。

石川: コミュニケーションなら何にでも置き換え可能って。

加藤: そうそう。

石川: そうなんですか。

加藤: そういうふうに認めてたんです。だから全く講読ガチガチで3本矢で固めてるというよりは, 80, 90パーセントはそうだけど, 10パーセントとか, 20パーセントは。

石川: 多分, 若い先生とかは, どちらかっていうとコミュニケーションをみんなやったほうが楽ですよ。

水口: 私もこれはすごく, この時期は。で, 何で(内容別3領域制を)崩したのかがよく分かんないです。

石川: ちょっと戻します。すみません。

水口: SOLAC(ができたころ)だよ。

石川: 話しを戻しますけど, 人文, 社会, 自然から, このリーディング, リスニングの技能別に変えた, というか戻したというか。この2002年改革の, 決定プロセスは, 結局, 先生のご記憶ではどうなんですか。

水口: 分かんない。

石川: じゃあ, そのことを議論した記憶はないですか。その部会なり, (そういう場所で?)

加藤: 議論はしてた。

水口: してるはずだけれどもすごく鮮明に残ってる記憶ではないので。

石川: 少なくともそこで、3分野を維持すべきだというような意見が出たわけではない。

加藤: ない。

水口: ない。

加藤: これ、誰が主導したんだろう。

水口: 崩れてたからじゃない? きっと。

石川: そのジョーカーカード制みたいなものによって、(3領域が崩れ)事実上みんなオーラルみたい(になっていた)ってこと?

水口: いや、オーラルやってる人は、今でもそうだけど、少なかった。そうすると英語の総合教材にだいぶ移行しているのだから、英語がすごく平易な英語になってるから、誰でも教えられるんです。だから格調高く、ストップワードを読んでいたりとか、シェイクスピアを読んでいたりって。あれって本当のプロじゃないと読めないでしょう? 背景も全部分かってる人じゃないと。でもそうじゃない人でも、時事英語とかもこの頃は割とみんなやったんじゃないか。そういうテキストもいっぱい出てきて。

石川: そこ、ぜひ伺いたいんですけども、全学の雰囲気というか圧力というか、期待という中で……。

水口: 期待は何もないです。

石川: ないなりにですけど、リスニングみたいなことの、意見が出始めた(ということですか)? 例えば今だとプレゼンしろとか、何か学会用のリスニングしろとか、そういう声(ありますが)、先生が赴任されたときの雰囲気としては一切なかったですよ。「英語1, 2, 3, 4」時代には。

水口: この変わった辺りから(そういう声が出始めました)。特に医学部です。医学部がいっぱい言ってきて、CNNをやれとかABCをやれとか、何かわざわざ指定してきて。

石川: 医学部なんだけどCNNなんですね。

水口: 医学部から随分と要望があって、ちゃんと文書で来たかもしれない。それでこういう組織ですからそんな動かなくて、承りましたぐらいで済んでいたら、そしたら医学部が業を煮やして自分たちで(教員を)雇った。

石川: 今につながる。医学部独自英語のコマですね。

水口: そう。だからこの辺りだと思う。

石川: その発端がもしかするとCNN問題だったわけですね。

水口: いや、CNN(だけではなかったかもしれませんが)とにかくもっとリスニングを。ちゃんとその放送が、BBCでもABCでもCNNでも何でもいいですけども、あれが聞こえるぐらいのリスニング力を付けてほしいという要望はあったと思います。

水口: 記録は多分、残ってないかもしれないけれども。それで業を煮やしたっていうのがあって、ですから入試なんかもそうですよね。自分たちでやりますって言うといつ……取りあえずやってみたかったんじゃないか。

石川: 医学部は今も特任か非常勤のような枠ですけども、独自の英語の先生を確保しておられて、学部でも独自の英語の授業をやっておられますよね、大倉山で。

水口: そうなんです。

石川: その点, もしかすると起源がこの辺りにあるのかもしれない。

水口: だから, このキャンパス(※鶴甲第1キャンパス=教養課程)の英語には何も期待してない。
だめだと見切りを付けたんだと思います。

水口: それがどうなってるかは, 全然関与しないところなので分かりません。

加藤: 待ってください。当時のメールが読めるかもしれない。

水口: 恐ろしい。

加藤: 多分, 1997年ぐらいからあったと思うんです。

加藤: 座談会のどこかで見つけたら言います。

石川: また教えてください。

水口: すごいです。これ, 大改革だったのに今はぼんやりしてて, すぐなくなっちゃったっていう。

石川: そうですね。2002, 2003, 2004 だか, 2004 年ぐらいですか。2002, 2003, 2004, 2005。

加藤: 大正デモクラシーみたいな。

石川: 一瞬よかった。

水口: ここ大好きだった。本当に。

加藤: 先ほどの, 分かりました。(内容別が)途中で変わってオーラル(などの技能別)が導入された経緯。O先生です。O先生がワーキンググループをやってて, 教科集団の代表もやってたかもしれない。(教員向けの)アンケートも採ってます。

水口: ワーキングからアンケートがあった?

加藤: 部会に対して。「3区分を廃止するかどうか?」ちょっと言いますと, 「(内容別の)現状このまま維持」が5票。「当初の(内容別の)趣旨を徹底して続ける」っていうのは, 多分...

加藤: 1票。「新しい枠組みを現行の制度の中で設ける」が7票。「現行を廃止し, 新しい枠組みをつくる」が7票。ということで「新しい枠組みを現行の制度の中でつくる」か, 「現行の制度を廃止して全く新しい枠組みをつくる」かが(それぞれ)7票で。この二つが拮抗してて, やっぱり変えようという。

石川: O先生判断。

加藤: Oアンケートが出て, それに具体策もこれに載ってるので, また参照してください。

石川: はい。資料に加えて(おきます)。

水口: メンバーも書いてあります?ワーキングの。

加藤: ワーキングのメンバーは今のところ(わからないです), これ, ワーキングのと書いてあるだけなので。

石川: 加藤: 先生自身はそこに入ってた記憶はあるの?いや, 入ってたからメールがある?

水口: 私, ひよっとしたら入ってたかもしれない。

石川: 入っておられた。

加藤: 私も入ってたかもしれない。

石川: 当事者が覚えてないんですか。

水口: メールがあるってことは。

石川: そう。ワーキングだからメールが来てるんじゃない?

加藤: これはでも、ワーキングからこんな結論が届きましたという教科集団の報告メールですけれども。

石川: 部会っていか集団に対するお知らせなのですね。

水口: O先生かそれか……。

加藤: やっぱりO先生がやったんだ。

水口: そうだ。

加藤: O先生は教育(学部)からこっちに移ってきてますから。

加藤: 今のメールが発信されたのが……。

水口: 何かO先生の顔の表情, 思い出してきた。

加藤: 2000年の1月26日なので, 1999年度の話です。

水口: この頃, 「人文, 社会, 自然」っていうのは見ばえがよかったんだけど, 実質は何もないっていうのがばれてきていて。

加藤: そうそう, 揺らいでた。

水口: そう。それでそろそろ文科省, まだ文部省か。分かんないけど。

加藤: 文部省。

水口: かな。そろそろ怒られだしてる。

石川: 当初はいいと思ったけれども。この実態では……ということになってきた。

水口: 今どきスピーキングもできないのはけしからんみたいな風潮があった。

加藤: ありました。

水口: それでオーラルとかってやったんですけれども。

水口: なるほど。

加藤: この時代, TOEICとかに, 力を入れはじめる風潮がでてきていた。

水口: そう。A大学なども。うちは, 「TOEICではやらない」とかって, 何かみんなで息まいてて。

加藤: A大学 TOEIC ブーム。

水口: そう。あのときに(神戸大では)「教科書に TOEIC 指定しちゃいけない」とかって。やっとこの辺りできたのかもしれない。

水口: (科目改革で)オーラル出てきたから TOEIC に(というふうに)非常勤の方(がとらえられて, そういう教科書を)たくさん指定されたのかな? で, 「これはどうでしょう?」, みたいなのが, 集団, 部会の中ではちょっと問題になって。

水口: こんなものを授業で教えるのですかっていう, そういう考え方もいらっしやっしたし。

石川: はい, ありがとうございます。

水口: そっかあ。

上級選抜クラス

加藤: あと少なかったけどネイティブとか, そういう人にオーラル系を任せた時期があって, その圧力が徐々に高まっていったって, 2000年代, リーディング4単位とオーラル2単位です。オーラルは2年生なんですけど, オーラルっていうのがあって, この時代, 非常によかったのは国文, 法学部のみですけど, リーディング上級, リスニング上級, ライティング, スピーキング, 同時通訳, 実用英語(などもありました)。

石川: 同時通訳?

加藤: 同通。

水口: あった。

加藤: 集中講義で。

水口: F先生のご関係で何か。

水口: ご紹介していただいた覚えがあります。

加藤: 全学的ではなかったんですけど。

水口: 国文と法文。

加藤: そうです。法学部(の単位数)が一瞬この時代に復活して(※法学部は単位数が他より少ない), これ, 学生に希望を出させて, それこそ先生方の手作業でしたけど, どこかに集まって振り分けてやったんです。

水口: 私, そのクラス, 教えました。すごくよく勉強してくれた。

石川: そのクラスとは, どのクラス?

水口: 選択制の, そのスピーキング。

石川: 上級クラス?

水口: そう, 上級クラス。

加藤: リーディングの上級, リスニングの上級。

水口: このときに1クラスの人数がガタッと減ったんです。だからすごくうれしくて。

石川: それは選択だから減ったっていう。

加藤: 選択だからだと思います。

石川: だからですかね。

水口: 法学部の子も来てくれて, わざわざ自分で希望を出して来るのですごい熱心だった。だからこの時期が私, 一番幸せだった。

加藤: この時期, よかったと思う。

水口: よかった, 私もすごく。学生もすごく勉強したし, 教師も1クラスの人数がすごく減った。(それまでのクラスサイズは)今と一緒にじゃないですか。ほとんど。それまでは10人, 20人多かったわけです。だからものすごく感じが違ってて。

石川: そうですね。

水口: この時期が一番楽しかった。

石川: 私, この時代に着任したんだと思う。だからK棟の一番上の部屋でプロダクティブという授

業をやっていた記憶がありました。

加藤：ありました。名前もプロダクティブでした。

水口：はい、ありました。

石川：スピーチしたりとか。結構おっしゃるように、やりたい子だけが集まっていたので、楽しい授業だったです。

水口：やりやすかった。

石川：これ、意外と好評な(感じだったんですか)。

水口：いや、教師には好評だったんじゃないか。

加藤：今思うと、私はこれ、いいシステム。学生にもよかったと思います。

教育目標

石川：じゃあ、この「リーディング、リスニング、スピーキング、プロダクティブ」時代の教育目標のことについて伺いたいんですけど、これもその担当の先生が目標から書いておられたのか、ある程度この辺は統一しようみたいな雰囲気だったんでしょうか？

水口：統一だった。

石川：統一だった。

水口：英語集団じゃなく、教科集団になってたと思うんです。

石川：はい。

水口：けど、誰かがリーディングはこうですとか、リスニングはこうですって書くようになった。

石川：恐らく当時の代表の人が。

水口：代表か、その時間割係みたいな。

石川：でしょうね。

水口：ちょっと大変な役をしてる人たちが書くようになって。ただ、まだ SOLAC ができてないので順番に。さっきの代表の名前を聞いてても年齢順だよ。よほど事情がない限りは年齢順に回っていたので。

石川：これ、1年ごとで変わってたみたいですね。

水口：そう。目まぐるしかったんです。だから引き継いで次。

石川：ただ、1年だと本当に慣れるだけで。このころ代表になられたのは、T, S, M, O, U, Y, I, Y, M の各先生、次に、2006年度に。

水口：はい、そうだと思います。

石川：その後、加藤先生です。お二人、並びでした。2006年度、2007年度で。

加藤：変わるときですよ。

石川：そうですね。

組織改編

水口: そう。で、SOLAC 変わるときだったので、結構大変だった。

石川: でしょうね。

加藤: (英語の開講曜日が)月曜日、水曜日に、まとまったときですよ。

石川: 月、水です。

加藤: 何か非常勤にメールで聞いた覚えがあるか。変わってもいいですかみたいな。

水口: あとこのときに誰が SOLAC 行くとか、組織がすごく動いたので。私、代表を年次順でやってたときにもものすごいいっぱい会議かけた覚えがある。

石川: 会議。今で言う部会を多く開いたということ。

水口: たくさん開いた。

水口: 細かいことが本当に大変で、今おっしゃったように今でももう少し曜日のバラつきがあったんですけど、月、水に決めるとか。そうすると非常勤に来ていただいている方がすごく制約されるとか。

水口: で、私終わって加藤さんに。加藤さんが SOLAC に行かれることになって、次、加藤さんになってっていう。

石川: ちょうど今、教科集団の話が出たので、資料の4のところなんですけど、この科目集団なる組織について、ちょっと伺いたいんですが、これもH先生の言葉なんですけれども、要するにこの教科集団っていうのがすごく先鋭的な、全国どこにもない神戸の独自のブレイクスルーだったというふうなことを回顧しておられます。何がすごかったかっていうと、専門、いわゆる学部の先生が一般教養を教える箱がやっとできたんだと。それまでは教養部教員じゃないと一般教が教えられないと。向こうは教えたかったかどうかは別として。それを教養部でもない、学部でもない、教科集団という箱をつくることで専門学部の人も同じように入ってくるができる。この仕組みが非常にユニークであって、ブレイクスルーであってというふうなことなんです。この辺りの経緯、特に英語に関しての質問は、もしその箱が元教養部教員だけではなくて、全学の英語に関係する人が入る箱だったら、どうして他学部の英語関係の先生がたが入ってこなかったのかっていう問題・・・この辺はいかがでしょうか。

加藤: 何かがないといけないということはあったわけなので(教科集団が作られたんでしょ)、教養部の先生方が分かれたり。でもほとんど教養部の先生方が引き継がれてますよね、うちの場合は。理系は分属しちゃったけど。国際文化学部で英語を担当していた人が90パーセントぐらい残ってて、それに文学部の人と、あとどこかな。文学部だけか。他の学部からは来なかったです。分属を受けてたところは・・・。

石川: リュック問題(※旧教養部教員が教養科目担当に関して持っていたノルマ。当該教員の部局が変わったり、後任人事があつたりしてもノルマは引き継がれるとされた)で。

加藤: リュックで出すということだったので。あと、海事の話はまだかな。

水口: まだです。

加藤: 海事の話はまだ先なんだけど、だからここで書かれているいろんな受け皿としてほぼ、教養

部の先生たちの、会議の枠組みを引き継いでいるので、そんなに議論にもならなかったし、あるとしたら他の学部からも入ったらいいのについていうような漠然とした思いはあったけど、実際には文学部からしかなかったということなんで。

石川: 資料によると当時は毎年、毎年、代表が変わっていたんですけども、この時代の代表選出は選挙だったのか、持ち回りだったのか。どんな感じだったんでしょう。

水口: ほとんど年功序列。

石川: 例えば水口先生がされて次、加藤先生がされてとか。

加藤: 教養部時代ですか。

石川: ではなくて、教科集団時代。

加藤: 教科集団時代って。

水口: どうだったっけ。

石川: Y先生から水口先生が引き継がれて、その後、加藤先生に引き継いでいく、時のプロセスのことですが。

加藤: 選挙です。

石川: 選挙。

加藤: 選挙だったと思います。

石川: 純粋な選挙ですか。

加藤: 選挙でした。

石川: 本当?

水口: 覚えてないけど。

加藤: 私が選ばれたのは少なくとも選挙です。私が水口さんの後を引き継いで選ばれたんです。Aさんと私、過半数に届かなかったか何かになって、もう1回やった。

石川: じゃあ、選挙だったんですね。

水口: 実際に選挙だった。ああそうか。

加藤: 選挙してました。

加藤: だけどみんな、なんとなく年齢順に。

水口: 年功序列でそういう人に入れてたんじゃない?

加藤: そうです。

石川: 当然その頃の、代表には手当的なものはなかった?

水口: ない。全然ない。

石川: 基本的には。

水口: ボランティアです。

センター(SOLAC)の設立

石川: だんだん時代が進んできて、センターの設置ぐらいのところに入っていきます。国文の英語系の先生は、当初、例えば全員とか、あるいはもっと大部分がセンターに動くような話で始まっ

たのか、あるいは、今の人数ぐらいが最初からイメージされていたものだったのか。あるいはもっと少なく、例えば2, 3人だけ動かして、その人たちに非常勤などのコントロールをしてもらうっていうのが狙いだったのか。この点に関して、当時の教科集団はどういうふうな意向だったんでしょうか。

加藤: 多分、人数、先にあったと思います。15人前後っていうのは、5, 5, 5ぐらい。

石川: 海事というか商船から5, 国文から5。

加藤: うち(※旧教養部=国際文化学部)からは5。それでどこから、多分、国文からのポジションをもらったんだと思います。あるいは学長から、全学からで別途5っていうようなことで。

石川: 新任の5ですね。新任っていうか外から来る先生。

加藤: そうです。

石川: K先生・Y先生・G先生と私が入った枠ですね。

加藤: その国文から出る5については20とかっていうオーダーじゃなかったです。国文のほうも存続しないといけないわけじゃないですか。20も外出たら大変なんで、そちらの支障があるのとのバランス。それからSOLACとして独立してやっていくだけの人数ということで5になったんじゃないか。

石川: その人数は例えば英語教科集団として、いや、国文教授会かな? そういう場所で、5も出せないとか、出たくないとか。(そういう話があったのですか?)

加藤: いや、英語だけの話じゃないので、(中国語の)N先生とか(も国際文化からセンターに移られたので)。

水口: そう。T先生とか。

加藤: そういうのがあった。英語で来たのは私だけ?

石川: T先生。

加藤: 私とTさんだけなので、教科集団的に2人も出たら駄目みたいな、そういう大きな話にはならなかったし、SOLACができるっていうのも既定路線化してしまっているんで、Tさんと私が出ることに対してすごい議論があったっていう記憶はないです。

石川: それは基本的に当時の部局長と個人の先生の個人ベース(の交渉)だったということですか。

加藤: Sさん(※当時の学部長)ね。

石川: 出る、出ないっていうのは。

水口: いろんな。

加藤: いや、募集しました。

水口: 募集だった。

加藤: 募集っていうか、行きたくない場合は行かなくてもいいという前提で、結果的に。

水口: 何かみんな顔色見てたみたい。

加藤: (一緒にうつられた方は、あと、)O先生ね。

センターと国際文化学研究科との関係

石川: センターができて、結局その当時の教科集団はセンターと国際文化学部と文学部(の3部局だったですね)。最初は文学部からも来ておられて、3部局で英語部会を回していくっていうことになったわけです。当初はご記憶のように、部会長もどっちから出てもいいと。文学部から出て理論上、悪くはなかったはずで、途中の段階で、部会長や幹事はセンターのほうから出しようというふうな形で、部会で決めたわけなんですけれども、これをやっているのは英語だけで、未修(外国語)はやっていません。この辺のことについてはどんな背景だったんでしょうか。これは私もある程度、記憶もあるんですけども、両先生の捉え方としては。

水口: いや、石川さんが何か提案したのがあったっていう。

石川: 文章を書いたような記憶はありますけど。

水口: 確か部会で。で、まだ SOLAC の中で話してないっておっしゃるから、じゃあ1回、SOLAC に持ち帰ってくださいと、私は言ったのを覚えてます。

水口: そのときに石川さんは、「このままだと何も変わらないですから、もう業を煮やしました」みたいなことをおっしゃったので、それはすごく鮮明に覚えてる。

石川: 結構、怒ってましたよね、あの頃。

水口: 怒ってました。

石川: よく叫んでましたよね。大きな部屋で集まった、全員の外国語の先生が集まった会議もありました。1回だけ。

外国人教員

水口: 私、SOLAC ができる前の英語集団のときっていうのは、実は外国人の先生とかには会議のお知らせすらやってなかったんです。そうすると彼らには、「自分たちには情報が来ない」と。「出る権利もないのか」って言って、かなり難しくなっていて。私のときからご案内を差し上げるようにして、じゃあ、会議のときの使用言語は英語なのか、日本語なのかみたいなこともあって。

石川: 外国人教師の方に連絡をするようになったのは、年号で言うとどのぐらいの時代からですか。先生の部会長時代?

石川: 教科集団代表じゃなく、部会長の時代ですかね?

水口: 教科集団です。まだ英語部会になってない。

水口: だって、加藤さんから(部会に)なったわけだから。その前ですから。

石川: はい。じゃあ、平成16年度ぐらいから一応、連絡をするようになった。

水口: そのときは文学部の先生方も出てこられたんですけども、やっぱり来ても、シャンシャンの会議ですよ、言ってみれば。何が決まるとか、すごく姿勢が変わるとか、そういうものではないので、次第にみんな出なくなったというか。この頃、組織が動いたので、外国人の方々も自分がどうなるかっていうことがすごく不安で、それで情報を送るみたいな感じで。

水口: 出てこられました。でも、すぐに出てこられなくなりました。これは出てもしようがない会議だって思われたんです。

水口: 彼らは学長が直接雇っているのか。何か雇用形態が違うんです。だからこれは別に出なくてもいいんだと、さっさと見切りを付けて。それでだんだんまた出なくなって。今だって本当は出なきゃいけないんだよね? 英語部会だって。

石川: そうです, 出てもいいし。本当は出ていただきたい。

水口: 出てこないよね。

部局協力とノルマ問題

水口: 本当はそういうのは良くないと思います。キャンパスが離れているっていうのもあるんですけども, キャンパス近くでも出てこない。そのうち文学部が教えなくなったとか。あれも文学部の人たちが「なぜ, 自分たちが教えなきゃいけないのか」って, ずーっと思っていて。教養部が解体したときに…。

石川: Aリュック。A先生のリュックとして向こう(文学部)に動かしたんでしたっけ。英語のノルマは。

水口: いや。沖原先生は(教育学部から)こちらに来られたんですけども, (教育学部から)文学部に行かれた先生もおいでだったので。

石川: 教養から?

水口: 教養ではなくて, 上の。発達…じゃなくて当時の教育学部。

石川: おられました。B先生とか。

水口: Bさんは…。

石川: あと, C先生。文体論の。

水口: C先生とか, 多分, そういう方々はリュックがあったんだと思いますけど。

石川: C先生, 教育から動いたんだったらリュックは背負ってないし, B氏も背負ってないはずです。文学部が継承した英語のリュックは, やはりA先生のリュックでは?

水口: その座布団っていう, 座布団って言ってたんですけども, それも公式な記録はあえて残してなかったの。だからどこかトップのところ, リュックが動いた, 動かないのって決まった。

石川: 座布団って今, われわれがリュックって言ってるのは, 昔, 座布団って言ってたんですか。

水口: 座布団って言ってた。

石川: それ, どんなメタファーなんですか。

水口: 知らない。

石川: リュックは何か分かるじゃないですか。荷物をしょってるイメージ。

加藤: 居座って, その人は変わっても笑点みたいに座布団が残るっていうこと。

石川: 週9枚分とか, 週6枚分の座布団があるみたいな。

水口: その座布団が何枚なのか, 実は誰も分かんなくなっちゃっていて, いつもそれで文学部と何かごちゃごちゃ上のほうでやってて, 下々はまたやっているとかって思って。結局は英語を教えたくないのよねっていう, そこに行き着いてしまっていて, 文学部の人たちも何人か教えに来られましたよね。

石川: あんまり経緯を分かってない先生の場合は, 意外と張り切ってやってくれてたことがあった

かもしれない。分からないですけど。

水口：私知ってる人たちは、みんな気が進まない感じでやってた。

6. 今後の展望

石川：だんだんつながってきました。最初の資料の9番、今後の展望っていう辺りにいきまして。

水口：はい。一番大事なところ。

コマ数の変遷

石川：その前にちょっとコマ数の変遷の話を伺いたいですけれども、今の話を伺うと英語についてはどうやら「英語1, 2, 3, 4」時代までは8単位(※2単位×4クラス)あったようです。なぜ私が(学生時代に)合計6単位で済んだのかというと、もしかすると文学部だったので専門でやるからいいよということだったのかもしれない。

水口：文学部だけ違ってたのかもしれない。

石川：かもしれません。

水口：昔から違ってたかも。今も違うけど。

石川：1992年に座談会があつて、細川委員会を率いておられたH先生が「英語を何単位にするか随分もめた結果、英語は6、未修は5と決まった」ということをおっしゃっています。このときに、教養部の先生が「いや、6はけしからん」とか、「8を維持しろ」とか、「いや、6でいいんだ」とか、どういうふうに議論に関わっておられたのか、関わっておられなかったのか。

水口：当時、教養部だったので、全学的なところに出ていく場がまずなかったっていうことがあつて、あまり覚えてない。

水口：いや、英語集団で、みんなでボトムアップで意見を吸い上げましょうという、そういう組織ではなくて。だから今おっしゃったようにそのヘッドの先生ですね。ヘッドと何か。

石川：ボス交渉みたいな感じで。なるほど。

加藤：要は大綱化と連動してるということは、教養部の廃止と連動してて国文ができるということがあったわけです。そうすると英語だけじゃなしに専門科目を教えなきゃいけないっていうような...

水口：主張があつて。

加藤：われわれの提供できるコマ数の関係があつたので、これ、8では持たんだらうという、恐らくTさんか、多分、何か言ったと思うんですけど、こういうことになったら。だから非常に外部的なあれがあつて、6だと英語教育が崩壊してしまうっていうような正論を出す人はいなかったと思います。

石川：結局減らしたっていうのはすごく簡単にいうと、教養部の先生が国文に変わられるときに新しく専門を持つからコマが増えるであろう、であるならばその分は一般教養のほうを減らす。それを保証するには全体のコマ数を減らすっていうような議論があつた可能性が高いですね。

加藤：非常に高いと思います。

石川: 別の資料を見ますと, T 先生へのインタビューというのがあって, そこで, 大教の Y 先生が関心を持って尋ねておられるのですが, 「何で神戸大は 6 コマなんだ」と。京大とか阪大に比べると今も昔も少ないですよ。今も少ないんだけど昔から少なかった。インタビューでは, 結局, 学部の側からいらんと言われたと。そうであるならば, 教養のほうも, ある意味, 売り言葉に買い言葉で減らすぞ, というふうなことで, 決まったんじゃないかっていうくだけりがあるんです。この辺りはそんな感じの雰囲気だったんでしょうか。

加藤: 私は全く分かりません。

水口: 私も分かりません。その下々の教員がそういう詳しい情報や裏情報っていうのは一切関与できなくて, 鶴の一声みたいな感じでトップ交渉だったのと, あとひょっとして, 単なる推測ですけれども, 学部からいらんって言われたのは特に理系からの突き上げで, こんな詩とかシェイクスピアを読んでも何の役に立つのだっていうふうなのは, ずーっとあって, 国際会議行っても全くしゃべれないじゃないかとか, あるいは, 自分たちがやっている理系の英語っていうのに触れる機会がないっていうのはけしからんっていうのは, ずーっと沸々としてありました。

望ましいコマ数

石川: それで今後について, ぜひご助言を頂きたいんですけども。単位数ってのは, これ, われわれが例えば 10 にしたいから 10 になるっていうもんじゃないんですけど, 今, 4 になってるという現状(※2019 年度より全学部 4 単位になった)についてはどんなふうにお二人は受け止めておられますでしょうか。

加藤: 遺憾です。遺憾だと思います。

加藤: 少ないと思ってます。

石川: でも具体的っていうと 4 が少ないって, 6 ならいいってそういう感じでしょうか。

加藤: 6 は死守。

加藤: で, 8 になれば理想だというのが私は思ってます。

石川: 昔, 8 でしたね。

加藤: いろんな条件を別にして。

加藤: 4 については少なすぎると思ってます。

石川: 水口先生, ここの, まず数の問題は何でしょうか。

水口: 私, これがなかなか言えなくて, 今後の展望とかこの課題にもつながるんですけども, ここが何ができないかっていうと, トップダウンの議論をまずしないんです。こういう目標があるからこういうカリキュラムがある。だからこういう, これだけの単位数がいるっていうのがあったら, すごく考えやすいんですけども, いつも部会で何か出掛かっては結局はみんなうやむやになってしまうっていうのが(あります)。神戸大としてどれくらいあったら学生に力が付いてるんだろうかっていうのを。今, 外部試験っていうのは入ってきていますよね。それで何点以上だったら単位いらんって言うてるんだから, そろそろ言ってもいい時期かって私は思っています。じゃあ何点くらい取ったら単位もいらんんだから, 後は自分で勉強してっていうことですよ。

だからこれくらいの力をつける、というのを明示すべきでしょう)。入ってきたとき、みんな違いますけれども。だから本当はもっと抜本的な改革が必要で、神戸大に来たら、最低、TOEICとか TOEFL でも何でもいいんですけども(そういう試験でこのあたりまではいくというような)。きっと世の中そのようになっていくんだと思います、これからグローバル化で。大学院だって外部試験でいいってところがすごく増えてるわけだし、ぎちぎちにすると、いつもおっしやってるけど私たちが私たちが自分の首絞めることになるので、それは避ける方向で(いくとしても)大体これくらいの力が付いたらいい(というような目標設定)。じゃあ、そのためには何単位必要なのか(ということでしょう)。あとは専門のことは、医学部のことなんて教えられるはずもなく、理学部も分からず、工学部だって分からない。だからその最低のところ。その外部試験でいいってくらい力をつける。それには何単位必要かっていうのが。

石川: そこがない限りは6か4かとか、4か8かという議論が成立しないと・・・

水口: 人によっても違いますよね。

水口: 最初から受ける必要ない子だっているわけだし、10単位やったって駄目な子は駄目にいるわけだし。だからすごくそこは判断が難しいところなんだけども、ただ、外的に説明するには、そっちのほうがしやすいんじゃないかって思いました。

水口: で、大体の平均でいいですから、例えば学部の、入ってきたときは大体これくらいなんだから何単位いるんだとか。それで試算して行って、実際にどれだけのコマ数があって、それには何人ぐらいの人員が必要でってというのは、私はすごく計算しやすいんです。だからトップダウンに、商売柄そういうのに慣れているのでその発想はよく分かるんだけど、逆に「どうしても10単位必要です」とかって言われて、「なぜですか」とってというのがなかなか説明が難しいと思ってる。

達成度をどう評価するか

石川: 今日、この後、外部評価委員会があって、そこでも出るかもしれないんですけども、神戸大学の英語教育の成果は?ゴールは何なのか?って話につながっていくと思うんです。加藤先生はこの点については?単位数の問題があるにしても、それをやって行ってどういう出口、どこを目指させるのか?って。それを明示的に計量するのが世の流れであるとするならば、我々もそうしていくのか。あるいは、私なんかはそう言ってるんだけど、TOEICは嫌だ嫌だっ言うんだったら、それに代わる何を見せるのかっていう、その辺りについては。

加藤: 筑波大学のやってるような、筑波だったか、何か最後の共通テストみたいな。

加藤: 今はやってない。ああいうのができない以上、その力がないのであれば、言い方はあれですけど CEFR。CEFR ということは TOEIC ということです、換算すると。

石川: 何らかのテストですね。TOEIC, TOEFL って。

加藤: 何らかのあれで B1 とか、B2 とかいうんであったら、B1, B2 自体を測るものは CEFR の、Can-do のやつでやってる人も分かんないじゃない。

石川: 分かんないですね。

加藤: だからレファレンスして外部テストでやるしかないの、いろいろとあるけれど私はそうだと思います。

石川: そうかあ。水口先生からその方向の話が出たので、加藤先生に(議論を)中和してもらおうと思ったんだけど、スタート地点の違うお二人は最終的には未来展望は同じところに行くわけですね。いろいろ思いはあるだろうけれど。

加藤: 抽象的なことで今言ってるとしても、それを何らかの形で可視化しないことにはっていうことになる、他に私は思い付かないんです。

石川: 例えばの話。今、TOEIC でいくと1年生の平均点が 550, 560 点ぐらいです。大体どの学部もそんな変わらないです。で、そういう人たちに一般教養として1年間、新制度では4単位で1年間、英語を毎週2回受けさせる。90分を週2回受けさせて、1年生が終わったときに、元が560だとすると、どんな感じがゴールなんですか。600点になってればOKみたいな?

水口: 今、単位もらえるの、何点でしたっけ?

石川: 今は730で1年生後期単位が免除です。今度(4単位化をふまえて)もうちょっと上げて800以上にしようとか言ってますけれども。

水口: そこまでは無理です、1年では。

加藤: 全学統一で「神戸大学は800点です」っていうような言い方だと無理があると思うので、人によって違うということを考える。それから、4月に英語を受けて3月に終わって、学生自身、あるいは教員も、(学生の英語力が)同じだとか、下がったなというようなことでは駄目だと思うんです。上がったという実感は持ってほしい。

石川: ただそこも難しい話で、A大学の例でも、私が昔調べに行ったときには、学部ごとに卒業時の目標のTOEICスコア、違うんです。A大学は体育系の学部とかもあって、おそらく神戸大以上に学部間の英語力の差が大きいところなんですけど、例えば神戸大でそれをやったらどういうことになるか? 大体イメージはできるんですけど、もしそれをやると、「この学問分野だから英語はとりあえず600でいい。この学問分野だから800いる」という風にはならなくて、結局、入学偏差値みたいなものを単にTOEICの数字に置き換えるだけになるんじゃないかなと・・・つまり、入学偏差値が相対的に低い学部はゴールのスコアも低くなって、医学部のように、入るのが難しい学部はゴールが800点っていうふうになりそうです。で、そういうふうになった場合、その数値目標の意味合いっていうのは、説明は難しい。

水口: あまり説得力がない。

努力か能力か

加藤: 私が言うのは伸び率が見たいので、一人一人違っていいと思うんです。

石川: 伸び率。私、自分でつくった資料に、「努力を見るか、能力を見るか」って書いてあるんですけど。

加藤: あるいは500の人が600, 700は800, 900の人は950とかというような意味での、一人一人違っていいと思うんですけど、伸び率があることが大事だということ。

石川: ちょっと意地悪問題みたいで恐縮なんですけど、ある種の思考実験として、500の人が600になった場合と、700の人がさぼって650になった。でも絶対的なレベルは(500点が600点になった人より、700点から下がって)650(になった人)のほうが高いとする。TOEICで決めるっていう理念は、努力を見ないで、測定されたプロフィシエンシーの高い順に点を付けていくっていう概念であると私は理解するんだけど、そのことと、努力を測るとか、伸び率を測るっていうのはどういうふうに整合するのでしょうか。

加藤: 努力か能力かですよ。半々。

石川: 半々?

加藤: 半々。絶対値的なTOEICの点数は、これは評価はする。それから伸びたのか下がったのかも評価するみたいな感じで、今のでいくとプラマイで結局同じように評価するみたいな、そんなイメージです。

石川: 水口先生、このところのそのTOEICなるものをもう少し使っていた場合に、絶対的なスコアの高さ、低さで見えていくのか、努力というか、伸び率というか、頑張りというか、その辺りってどういう。

水口: 努力の可視化がすごく難しいですよ。

石川: 難しいです。

水口: あと、神大に入ってきたら、1年たったら学生たちは「絶対下がってる」って言うんです。「(1月の授業で)もうすぐセンター(の時期)ですね。皆さんもう1年たちましたね」とかって言ったら、あの頃は毎日英語を見ていた。今は見ない。だから下がってるって言わせちゃ駄目だなんて思って。学生がそれは自分で努力もしてないし、能力も自信がないわけです。そういう学生を私たちはずっとつくり続けているので、それは組織の問題だって自分でも思います。で、どうやって見るかっていうのは、これは一大学でうんぬんしてもしょうがないんじゃないか。結局英語教育って社会からの圧力がすごいわけですから、その社会に向けて一応これやってますって見せるのは、今のところ、私もTOEICは好きではないですけども、TOEICのスコアである。TOEFLは使わないから。企業が使わないんです。それだけの話なんですけど、ここは大学だからTOEFLでも、IELTSでもいいです。必要枠で換算すればそれで済むことなんですけれども、大学生としてやるからには(一定のスコアがいるということを示すべきでしょう)。イスラエルなんかそうなんですって。イスラエルの人ってすごくみんな英語が堪能ですよ。

水口: あれは大学ですごい高い基準があって、それをクリアしない限り卒業はできないんです、とイスラエルの学生さんに聞きました。

石川: ただ、イスラエルなんかだとどうなんでしょう。大学の上級レベルとかだと、恐らく英語でのインストラクションじゃないですか。

水口: そうですか。

石川: EMI(※English as a medium of instruction)。英語ができないと(専門の)勉強ができないっていう。

水口: でも、それはそのまま(日本に)導入することはもちろん無理ですけども、ただ、何らか

の・・・。

外部試験をどう使うか、使わないか

石川: 中国のCETとか。全大学共通, 全国共通の大学修了試験みたいなものを英語に関してばんと置いておいて, そこを通らないと卒業させないみたいな, そんなイメージですかね。点数をパンッと明示して。

水口: 本当にさっきも言ったけど, (このスコアをクリアすれば英語の授業を) 受けないでいいって言うてるそういうスコアがあるんだったら, そこの整合性をまず考えないといけない。

石川: そうなんです。私もあれをつくっちゃったっていうか, つくらされたときに嫌だなと思って。あれをつくっちゃうと, もう(TOEIC等のスコアの使用に) 反対はできないので。一方で何点取れたら, はい, 単位出すって言うておきながら, いや, うちの大学は TOEIC は目標じゃないですとか言うてるのは, 整合性が破綻してるので。

水口: (すでに基準点があるのに) 4 単位取りなさいっていうのが, 整合性取れないです。

石川: ないですよ。

水口: だからそれを何かうまくつくらなきゃいけないのと, あと外部評価とかで必ず言われますよね。この目標は何ですかっていうのを言われるので。

石川: ということは目標論に関しては両先生, TOEIC 的なもののスコア以外には方法はないというご意見で。

水口: 可視化できるものが求められるっていう前提に立てば。

石川: それは「人文, 社会, 自然」の3領域を幅広く学んで, 内容に触れて, 人間の人格をどうこうするというような M 先生の作文ではもはやちょっといけないということ?

水口: いや, それはそこから個人がやることであって, 英語教育でやることなのかしら。

水口: 知識とか知恵とかっていうのは, 英語教育で何単位やったから身に付きますっていうことになると, それは「はい, そうです」とは, 私には言えない。これは英語教育のことを考えればいいんですよ。

加藤: 大きな本当の人間性です。最終的な教育の目標はそうではあるんだけど, 英語のレベルまで細分化されていったところでは, やはり何らかの支えみたいに外的な枠組みみたいなものも必要なんではないかって思うんです。

加藤: それの至上主義とか, 絶対化するっていうのはおかしい。

石川: ただ, 難しい。何か入れてしまうとそれが絶対化・至上化しますよね。目標は何点だったんっていうと。

加藤: 努力を見る。一生懸命頑張ってる子。

石川: 最近しなくなりましたが, 私, 加藤先生とこのテーマで結構論争しましたよね。

加藤: そうですか。私と逆の立場だった?

石川: はい。常に, 私の反対のことをおっしゃる・・・

加藤: そうかなあ。

教員の資質

石川: じゃあ、次の話は、英語の指導者の資質。例えばの話、TOEIC 予備校から先生に来てもらったほうが、多分、TOEIC の点数を上げるのはお上手かもしれない。英語学者、英語教育学者、英文学者がいいのか。あるいは、専門家よりも、グッドティーチャーみたいな人がいいのか？これからの神戸大の英語教育を中心的に担っていく人はどういう人であるべきとお考えでしょうか。

水口: 目標と、あと学生が今やりたがってることをちゃんと見据えないといけないと思うんです。学生は自分の言葉でしゃべりたい。でも私、音声はすごく、1 から、フォーニーム(※音素)から全部教えるんで、イントネーションまで教えるんですけど。習ったことはありませんって、ほとんどの子が言う。それはよろしくない。いつまでもコンプレックスを持ってはいけないので、音声教育をやって、もっと学生に自信を持たせる。あなたの発音大丈夫。聞こえないのは相手のせいって思わせるくらいにしとかなないと、自信もってしゃべれないです。あと、今いろいろイクイップメントがあるのに、使い方、知らないですよ。音声にしてもそうだし、ライティングにしてもあるんだけど使えてない。こうやってできるんだと。あと留学生も来ますけど、留学生も「スズキケン」(※東大の開発した日本語韻律発音トレーニングサイト)を全部たたき込んで、プラート(※音声分析ソフト)の使い方もたたき込んで。そうすると自分で分かるっていうんです。

水口: これはすごく難しいことなんだけれども、神戸大の最大の弱みは二つあって、一つは目標がないことと体系化してないこと。致命的だよ。

石川: その言葉でこの座談会を終わるのは、私としてはちょっとこれはつらいんだけど。

水口: 私は 37 年もいたのに、結局個人のレベルでしか何もできなかったの。

石川: それはみんなそうです。

水口: それは石川さんが昔、怒ってたのはすごくよく分かるんだけど。

石川: もう怒らなくなりました。

水口: 怒らなくなったら終わりだ。

加藤: 目標もつい最近、アカデミックという枠組みで固まってきたし。

水口: そうしたらアカデミックにいくための最低のものを付けてあげたらいい。一般教養で。

水口: そうすると大体何点。そのためには何と何がいきますから、こういう科目数をオファーします。こちらとしては提供しますって。これをクリアしていただかない限りは上に行けませんっていう。

水口: そうしたら私的にはすごくはっきりとした、つくるのは大変ですけど。そうやって去っていきませんが。

加藤: 私はだからこの指導者の資質としては、もちろん真ん中に人間性ですよ、私はね。人間性みたいなものがあって、(さらにその上に)英語学も知ってる。英語教育も知ってる。文学も知ってる。運用能力もあるみたいなのが周りを囲んで。深くというか、英語学一本道というんじゃないなくても、自分は英語教育の専門なんだけど、英語学も英語史もいろいろと知っていてオー

ルラウンドであるのが良い先生ではないんですか。

石川: 分かりました。

加藤: むっちゃ理想だけど。

水口: むっちゃ理想, なればいい。

石川: ありがとうございます。きょうは大変長い時間にわたっていろいろご意見を聞かせていただきありがとうございます。

参考文献

大野隆(2017)「神戸大学における教養教育の現状と課題:8年間を振り返る」『大学教育研究』(神戸大学)25,1-11.

瀧上凱令・川嶋太津夫・米谷淳・山内乾史(2005)「瀧上凱令・元大学教育研究センター長を囲んで:座談会」『大学教育研究』(神戸大学)13,71-87.

多淵敏樹他(1997)「<座談会>神戸大学における教育システム改革を考える:多淵敏樹先生を囲んで」『大学教育研究』(神戸大学)5,1-28.

水口志乃扶(2018)「ミセラニとは何だったのか」神戸大学英米文学会(編)『教養主義の残照—Kobe Miscellany 終刊記念論集』(pp.267-277)開文社.

森晴秀(1993)「ハーヴァード大学のコア・カリキュラムと神戸大学の教養原論」『大学教育研究年報』(神戸大学)1,9-22.

油井清光・合田涛・竹内康滋他(1993)「座談会「大学の将来を考える」」『大学教育研究年報』(神戸大学)1,28-44.